

森藤香奈子 論文内容の要旨

主 論 文

The relationship between physical signs of aging and social functioning in persons with Down syndrome in Japan

ダウン症者の身体的老化徴候と社会適応能力の関連

森藤香奈子 松本正 近藤達郎 永江誠治 佐々木規子 宮原春美
本田純久 田中悟郎 森内浩幸 中根秀之

ACTA MEDICA NAGASAKIENSIA・2014年3月 掲載予定

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻
主任指導教員：中根 秀之教授

緒 言

ダウン症者の平均寿命は、1949年は12歳程度とされていたが、2002年には60才程度と延長しており、近年、成人ダウン症者の社会適応、健康問題や家族の生活の質に着目した研究が注目されている。日本において、成人ダウン症者の社会適応・生活能力に関する調査は少ない。またダウン症者は身体的老化が早期に始まることが知られているが、詳細な調査はされていない。

このため本研究では日本における15才以上のダウン症者を対象として、社会適応能力（移動能力、会話能力、日常生活能力）と身体的老化徴候の出現状況について調査し、加齢による変化について分析を行った。

対象と方法

本研究は15歳以上のダウン症者を対象とした横断的調査である。研究協力の同意が得られた入所施設（以下：施設）、作業所、グループホーム（以下：GH）計127施設および患者会2団体に対し、計1300部のアンケート用紙を発送した。調査は2009年7月～12月に行い、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科倫理委員会の承認を得て実施した。

調査内容は、社会適応能力3項目、身体的老化徴候10項目および属性（年齢、性別、生活の場所）とした。回答は対象者の現況をよく知る介護者に依頼した。社会適応能力は、自立、要介助、困難の3段階で、身体的老化徴候は出現の有無で評価した。統計的解析はSPSS Ver.18を使用し、 $p<0.05$ をもって統計的有意と判断した。

結 果

アンケート回収 551 部（回収率 42.4%）のうち、不完全回答を除いた 315 部を解析対象とした。回答者は、家族 39%、施設職員 55%、不明 6%であった。対象者の平均年齢は 33.2 才（SD=12.8, 15-65 才）で、年代別の男女比に有意差はなかった。

社会適応能力の自立度は、移動能力、会話能力、日常生活能力共に年代が高くなるほど有意に自立度の低い対象者が多かった（ $p<0.01$ ）。

身体老化徴候の出現頻度では、10 項目すべてにおいて年代が高くなると有意に出現頻度が高くなっていった（ $p<0.01$ ）。最も出現頻度が高かったものは白髪（40.6%）であった。眉の長毛と頭髪脱毛以外は全体の出現頻度が 20%を超えていた。

従属変数を社会適応能力の自立度、独立変数を身体的老化徴候の出現項目数および年齢として重回帰分析を行った。移動能力では、身体的老化徴候（回帰係数： $B=0.023$, 標準誤差： $SE=0.007$, $**p<0.001$ ）、および年齢（ $B=0.032$, $SE=0.015$, $*p=0.029$ ）、日常生活能力では、身体的老化徴候（ $B=0.079$, $SE=0.016$, $**p<0.001$ ）、および年齢（ $B=0.075$, $SE=0.035$, $*p=0.032$ ）といずれの能力も身体的老化徴候の出現項目数と年齢の影響を受けていた。会話能力では身体的老化徴候（ $B=0.106$, $SE=0.022$, $**p<0.001$ ）、年齢（ $B=0.037$, $SE=0.047$, $p=0.434$ ）と年齢の影響は少なく、身体的老化徴候の出現項目数のみ影響があった。

考 察

社会適応能力において、移動能力は対象者の 96%が自立していて、ダウン症であることや加齢の変化が少ないと考えられる。会話能力および日常生活能力は、30 代より緩やかに低下が始まり、50 代でさらに自立群の割合が低下していた。ダウン症者の認知症のリスクは 40~50 才で高くなるとされているが、早期発症のリスクも指摘されており、20 代から細やかな観察が必要と考える。

年代毎の身体的老化徴候では、白髪、歯の脱落、円背、皮膚のしわの 4 項目の出現頻度が各々全対象者の 25%を超えていた。本調査のように身体老化徴候の概要を調査した研究は他にはなく、ダウン症者の健康管理に役立つ情報を含んでいる。歯の脱落は、40 代 48.0%、50 代 78.8%にみられた。ダウン症者は重度の歯周病が多いことが知られており、定期的な歯科検診が必要である。

身体的老化徴候と社会適応能力の関連については、社会適応能力は、移動能力および日常生活能力は身体的老化徴候の出現項目数および年齢に影響を受けていた。この結果は、身体的老化と運動能力の低下は同時進行で起こっていることを示唆している。会話能力は、身体的老化徴候の出現項目数のみが影響しており、年齢が若くても老化徴候の出現は会話能力低下を示す可能性がある。以上の結果より、ダウン症者において、身体的老化徴候の出現によって社会適応能力を予測する因子となることが示唆された。介護者がダウン症者の身体的老化徴候出現に気づいたとき、能力低下が始まっている可能性があることを知っておくことで、早期介入によりダウン症者の生活の質を改善できる可能性がある。